

令和3年度第3回教育改革推進会議概要

日時 令和3年10月4日(月) 18時00分～20時00分

場所 三重県庁7階 教育委員室(オンライン会議)

出席 教育改革推進会議委員(欠席:荻原委員、谷ノ上委員、山田委員)
教育長、副教育長、諸岡次長
教育政策課、高校教育課

【次期「県立高等学校活性化計画」の骨子について】

- 今回、望ましい学級規模を、他県の状況もふまえたうえで、4学級から8学級に見直したということだが、4学級以上とする県が多数であったという状況が以前から変わっているのかどうか、全国状況が変わっていないのであれば、今回本県が見直すにあたっての理由付けがもう少し必要だろう。例えば、4学級の学校であれば、物理・化学・生物や日本史・世界史・地理などの科目を開くことができるが、3学級になると開設できなくなる科目が現れたり、専門の教員が置けなくなったりするなど、多様な学び、或いは各教科の専門的な教員が揃わない状況などを、具体的な状況を交えて説明できるとよいのではないか。
- 令和18年までに県全体で約110学級の減少が予想される中で、4学級以上を望ましい学級規模とした判断には、県立学校を維持するにあたっての相当の覚悟を感じる。一方で、教育機会を提供できなくなる地域に例えば分校を置くといった対応もやむを得ないと思うし、小規模の環境を望む生徒も一定数はいると思うので、例外的な扱いも必要である。また、望ましい学級規模の設定については、他県の状況によるのではなく、4学級から8学級がどのような点で望ましいのか、積極的な理由を示すべきだろう。
- 規模と配置の考え方の中には、水産高校などの特色ある学びや、地域の中で教育機会を確保する必要がある場合など、例外的な部分があることも明記して欲しい。
- 県立高校の魅力化・活性化の中の一つの方向性として、小中学校との連携が大切になってくる。特に、今後高校で本格的に導入される探究活動については、小中学校における総合的な学習の時間での学びを生かすためにも、小中学校との連携を含めた活性化が必要だろう。
- 資料4「4 小規模校活性化の総括的な検証」の(生徒の進路実現について)で、「地元企業への就職状況に変化はなかった」とあるが、これは就職者数に変化がなかったのか、あるいは就職率のことなのか、どちらを指すのかによって取組の効果の検証における意味合いが変わってくる。

- 資料3の「1 高校教育を取り巻く状況」の(教育に係る動き)で、新学習指導要領でうたわれている「社会に開かれた教育課程」という考え方に触れておく必要があるのではないかと。

【次期「県立高等学校活性化計画」の骨子について】

- 普通科・普通科系専門学科の取組について、「専門的な知識、技能、能力や態度の育成」とあるが、普通科の範疇を超えているように感じるため、あくまでも普通科におけるキャリア教育として「専門的な知識、技能に触れる機会を与えることや、それによって自立に必要な能力や態度を育成する」という表現の方がいいのではないかと。また、国が普通科の類型として示している「学際的な学び」や「地域課題の解決」といった考え方に触れることが必要ではないかと。
- 多様な生徒が安心して学べる教育の推進において、不登校の状況にある生徒や、義務教育段階の学び直しが必要な生徒への支援が示されており賛同するが、そういった状況に至る前にケアをするという視点も大事だろう。学び直しが必要にならないよう義務教育段階でしっかり学べるようにすることや、生徒のメンタル面での問題や学校に来づらいつ況を把握して未然に対応する、といったことが必要だろう。
- 多様な価値観を交わし合う中で子どもたちが育つという視点を忘れてはならず、そのためには一定の学校規模が必要となってくる。また、社会情勢の変化に対応しながら自律的に学び続けられる教職員を育成していくためにも、一定規模の教職員が必要だと思ふ。
- 現在の教職員研修は詰め込み型で、かつ内容・回数ともに肥大化しているように感じられるので、より効率的なものとしていくとともに、教職員数も減っていく中で、一人ひとりのスキルの向上が求められていることから、その内容を変えていく必要がある。また、学校経営については、一般企業のように、管理職だけでなく、教員にも責任を持たせてやっていけるようにした方がいいだろう。
- 日本の高校教育にはデジタル読解力に弱さがあると指摘されていることから、ICTをツールとして活用する学びの推進という記述からもう少し広げて、ネット上の情報の信憑性を評価する情報教育についてもふれるとよいのではないかと。また、本会議は、県立高校の統廃合をゴールとするのではなく、その活性化を行うためには規模と配置の問題を解決しなければならない、ということ念頭に置いて議論していくことが目的だと考えている。そうした繋がりが読み取れるように記述すべきだろう。

- 今後の加速度的な人口減少をみると、紀南地域において紀南高校と木本高校の2校を存続し続けることは厳しいと感じる人達が増えてきている。子どもたちの選択肢が減ることや通学の問題について、地域でしっかり議論して欲しい。また、地域に2校を残せるよう、両校が長年、地域とともに活性化を進めてきた歴史があるため、もし統合するとしても、今まで地域と一緒に進めてきた取り組みが無駄にならないように考えて欲しい。
- 小中学校にとって、高校の活性化・魅力化の方向性は、生徒が進学を検討するうえで重要であるため、小中学校の先生方、或いは保護者も含めて、高校の活性化に意識を持ってもらい、方向性を分かってもらうことが大切である。また、探究活動やキャリア教育は高校だけで完結するものではないため、小中学校との繋がりの中で発展的なものとしていくことも必要だと思う。そうしたことから、小中学校との連携の視点をもう少し盛り込んでもいいのではないかな。
- 現在、一身田中学校で、地域の方々と一緒に学校支援地域本部事業に取り組んでいるが、高校と連携できずに中学校で完結してしまう。地域を探究する取組は、中学校でもキャリア教育の中で行っているのだから、小中高一貫した取組にしていけると思う。
- 小規模校の継続やその学びの継承を考えていくのであれば、教員同士で切磋琢磨や研修の機会が持ちにくいといった課題解消のために、例えば、学校間での教員の行き来やICTを活用したりリモート学習の実施といった取組を進める、といったことにふれておくとういのではないかな。
- 学校の中だけではなく、家庭との連携をふまえた家庭学習でのICT活用という視点もあるだろう。また、デジタル端末を活用する時間が子どもたちの中で増えてきている傾向があるため、授業でツールとしてICTを活用するだけでなく、メディアを主体的に使いこなす力の育成を、小中学校と連携して取り組んでいくことも考えていく必要があるのではないかな。
- 高校は生徒と教員の距離が遠いように感じるのだから、進路や就職のことで生徒に寄り添った指導をしていただくとありがたいし、生徒が将来に向かって目的意識を持って学べるような環境を作っていただくことが大切だと思う。
- 本会議は、三重の教育の大きな方向性を議論する場であることは承知しているが、例えば、誰一人取り残さない教育の推進という観点で子どもたちをどのように支えていくのか、といったように、ある程度の具体性が見える中での議論をしていくことも必要だと思う。